

はだの歴史博物館令和6年度企画展

# 秦野にいきた女性たち —それぞれの物語—

令和6年11月23日(土・祝)～令和7年1月19日(日)

令和7(2025)年は国連が「国際女性デー」を制定して50年になります。

かつて、女性たちは、封建的社会の中で良妻賢母、婦徳こそが美德とされており、さらに農村においては家事や子育てのほか、労働力として農業に従事することも多くありました。このような時代に秦野で“生きた”そして“活きた”女性たちのそれぞれの物語を資料や写真などから解説します。

## 寺子屋の女性師匠～教育の礎～

### 寺子屋と女性師匠

寺子屋は、庶民の子どもが読み・書き・算盤などの初歩を学ぶ簡易的な学校で、江戸時代中期以降発達し、幕末には全国に広く普及しました。寺子屋の教師は師匠と呼ばれ、生徒は寺子と言いました。

公的に制度化された施設ではなく、私的な機関（私塾）であり、師匠の身分は寺社53%・庶民37%・武家9%・不明1%という状況で、そのうち女性師匠は全体のわずか1.9%ほどでした。

女性師匠は読み・書き・算盤だけでなく、女性特有の裁縫・活花・礼など、当時の女性が身につけておくべき教育が行われていた可能性もあると考えられています。

江戸では天明5(1785)年に江戸本郷湯島で市川シマが開業した市川堂が最も古い女性師匠の寺子屋といわれています。

### 秦野にいた寺子屋の女性師匠

江戸から離れた秦野地域には、宝暦年間(1751～1763年)の開業とされる寺子屋の女性師匠の筆子塚が渋沢に存在しています。この墓碑には、「天明2(1782)年勉誉妙春大姉位」と刻まれており、女性師匠の墓としては、神奈川県内最古といわれています。戒名からして、比丘尼もしくは、地位のある在家の女性であったと思われます。

また、平沢には「草山津祢」と刻まれた墓碑があり、女性師匠の筆子塚として明治期に建立されたものと考えられています。

秦野地域において、判明している寺子屋の師匠は37名おり、そのうち2名が女性師匠とされています。全国的にも女性師匠の数が

わずかな状況の中で、秦野地域には全国的に早い時期から女性師匠が存在していたことになります。



渋沢にある女性師匠の筆子塚。正面には「天明二壬寅年 勉誉妙春大姉位 三月二十八日」とある。(秦野市教育史第一巻近代資料編より)



平沢にある女性師匠の筆子塚。正面には「草山津祢いらつめ女之神霊」右側面には「明治三十一年九月十五日 行年二十三才」とある。(秦野の筆子塚調査スケッチより)

### 筆子塚

寺子屋の師匠に対して心から敬意を表し、その学恩に謝するとともに師匠の菩提を弔い、いつまでも後世に残るようにと建てられたもので「師匠名、身分、業績、没年月日、造立年代」などが刻まれています。



## 幼稚園を設立した女性たち

### ～未来への希望～

#### 幼稚園の設立

大正2(1913)年6月12日、平野セン、三武ナミ、横溝モトの3名は、秦野町立尋常高等曾屋小学校(現秦野市立本町小学校)内の教室を保育室に転用し、遊戯室を設置します。秦野で初めての幼稚園である私立秦野幼稚園(現秦野市立本町幼稚園)が誕生しました。

神奈川県内では、明治13(1880)年横浜に創立されたキリスト教系のブリテン女学校幼稚園が最も古いとされ、明治43(1910)年に16園まで増加しますが、相模川より西側の県西部地域には幼稚園の開設はなく、人口11,000人程度の地方都市での幼稚園設立は先駆的なものでした。

かつて秦野の自慢のものは「水道事業」・「電気事業」・「幼稚園の設立」と称され、地域住民の誇りでした。

#### 幼稚園を創設した3名の女性たち

秦野地域で初めての幼稚園を創設したのは、平野セン・三武ナミ・横溝モトの3名の女性たちでした。



三武 ナミ

平野 セン

横溝 モト

3名とも嘉永6(1853)年生まれで、少女期には平野センと三武ナミが習字・裁縫・修身学、横溝モトは習字と修身学を学んでいました。3名の家は、たばこ製造と仲買業を営んでおり、ともに実子はいませんでした。教育には大変関心がありました。

3名は「<sup>よなげるかい</sup>淘会」(=<sup>どうきゅうかい</sup>淘宮会)の会員で、その会を通して平野センと三武ナミの間で幼児教育の必要性が語られ、そこに横溝モトが加わり、幼稚園の設立が具体化していきました。

3名は、地域活動にも熱心で、明治36(1903)年に愛国婦人会に入会し、大正2(1913)年には終身会員となっています。

軍資金の献納や、曾屋小学校への寄付も行っており、その実績と信頼から地域婦人活動の中心的存在であったと考えられます。

#### 淘宮

淘宮とは一本の線香を立てて、灯り終わるまでの間に自己反省を行うというもので精神修業・開運のための修業でした。

#### 幼稚園のあゆみ

幼稚園設立初年度の在籍園児数は53人、職員は初代園長で曾屋小学校校長兼任の武新次郎、曾屋小学校教員の原モト、代用保母の浜野ハマの3名で、9月5日に南秦野小学校の代用教員をしていた井上イトが加わりました。



秦野幼稚園 大正2(1913)年  
(新築落成記念誌より 昭和12(1937)年)

当時、幼稚園経営の大部分は寄付により賄われており、開園に至るまで3人はザルを持って資金集めをしたと言われています。

また、開園後も人形の着物や帯をいくつも作り、着せ替えの遊び道具としたり、お手玉を作って玩具不足を補ったり、おやつ等も持参するなど、献身的な奉仕をしていました。

幼稚園の維持・経営については保育料と入園料で賄っていましたが、全て賄いきれるものではありませんでした。

そこで、もし不足した場合には、3名の創立者が負担するという決意をしていたと言われています。

大正4(1915)年になると、私立では教育上の不利益が少なくないことから、幼稚園及び遊技場、玩具や備品等全て秦野町へ寄付を申し出ました。

町は、この申し出を受け入れ、大正4(1915)年11月1日に秦野町立尋常高等曾屋小学校付設秦野幼稚園が誕生しました(大正15(1926)年に秦野町立秦野幼稚園に改称)。



秦野町立秦野幼稚園 昭和3(1928)年  
(卒業記念写真帳より)

昭和の時代に入ると、保育料の値上げや経済恐慌などの影響により、園児数は減少しますが、昭和19(1944)年に至るまで園児は増え続けました。昭和20(1945)年になると、戦争の影響で男児のみの通園となりますが、県下の幼稚園がほとんど休園するなかで

秦野幼稚園は存続しました。

戦後になると、園児数は増え続け、市内他地域でも次第に公立幼稚園が誕生していきました。

昭和30(1955)年の市制施行に合わせ秦野市立本町幼稚園に改称し、今日に至ります。



秦野町立秦野幼稚園 昭和13(1938)年  
(卒業記念写真帳より)

### 園名のいわれ

昭和30(1955)年秦野市の誕生により、旧秦野町の小学校や中学校の名前が‘本町’となり幼稚園も本町幼稚園となりましたが、「水無河畔にあるので河原幼稚園はどうか」などの声もありました。

秦野幼稚園の名前を残したかったのですが秦野幼稚園では秦野を代表した名になるとの意見があり、教育委員会の決定で本町幼稚園になりました。



## 再発見！？

### 秦野にいた2人の女性

#### 原 モト

教育者

明治22(1889)年3月12日生まれ

昭和22(1947)年3月16日没(享年58歳)



原 モト 撮影年不詳

原モトは、旧中郡大根村(現秦野市大根)で麴屋を営む旧家に生まれました。

明治36(1903)年に尋常高等大根小学校を卒業し、明治38(1905)年に小学校準教員検

定に合格。翌年には平塚市四之宮校の準訓導となりました。

明治40(1907)年に神奈川県女子師範学校が設立されると退職し、入学。明治44(1911)年に第1回卒業生として、尋常高等曾屋小学校(現秦野市立本町小学校)の教員になりました。

大正2(1913)年には幼稚園設立の助言者として貢献し、幼稚園職員も兼務しました。

大正3(1914)年から4(1915)年頃に税務署勤務の原大丈夫氏と結婚し、3人の男児を出産します(二男は早世)。出産後も仕事を続けていくために、夫と子どもはモトの実家で暮らしましたが、大正13(1924)に夫が急逝しています。

大正13(1924)年に秦野町婦人会役員に就任して以降、数々の婦人関係団体等の役員を歴任し、大正14(1925)年に市川房枝らが設立した日本の女性権利団体である

婦選獲得同盟の会員にもなっています。

昭和14(1939)年になると、日本が満州国への移民を定着させるために、大陸の花嫁を要請するという政策に呼応して、小学校教員を退職後、自宅を改造して神奈川県下でいち早く花嫁学校(秦野家庭寮)をつくり、開寮しました。

自ら教師となって未婚女性に家事、裁縫、お茶、お花など、家庭生活に役立つ事柄を教育し、その功績が認められ、昭和15(1940)年には勲八等瑞宝章を賜ります。

しかし、大陸から帰ってこない花嫁もおり、満州の実態が明らかになるのに伴い、モトを苦しめます。「彼女たちのために近くの弘法山に碑を建てて、供養をしたいという希望を果たせなかったことが唯一の心のこり」と、昭和22(1947)年3月16日に脳血栓で亡くなりました。

#### 原 モト 主な業績

明治22(1889)年	神奈川県中郡大根村に誕生
明治36(1903)年	尋常高等大根小学校を卒業
明治38(1906)年	小学校準教員検定に合格
明治39(1906)年	尋常高等四之宮小学校 準訓導
明治40(1907)年	神奈川県女子師範学校入学
明治44(1911)年	神奈川県女子師範学校卒業 尋常高等曾屋小学校訓導
大正2(1913)年	秦野幼稚園設立に貢献 秦野町婦人会総務
大正3(1914)年	秦野幼稚園創設主任兼任
大正12(1923)年	秦野町婦人会女子青年会長
大正13(1924)年	秦野町立実業補習学校 助教諭兼任
大正14(1925)年	婦選獲得同盟会員
昭和5(1930)年	神奈川県女教員会副会長
昭和11(1936)年	教育状況視察員として満鮮地方に派遣
昭和14(1939)年	秦野家庭寮(花嫁学校)を開寮 満州国三江省第二次移民団 千振郷の神奈川村訪問
昭和15(1940)年	紀元2600年記念式に参列
昭和22(1947)年	脳血栓にて逝去



花嫁学校集合写真 昭和15(1940)年頃

## 大津 圓子

実業家

明治39(1906)年10月10日生まれ

平成12(2000)年没(享年94歳)



大津 圓子

(広報はだの 昭和60(1985)年1月1日号より)

大津圓子は、旧中郡東秦野村(現秦野市東田原)出身で、東京都千代田区にある岩佐高等女学校を卒業しました。

在学中から、神田神保町にあったYWCAで英語を勉強し、卒業と同時に麹町のドイツ人宅の英文タイピストとして働き出しました。

21歳の時に旧三井物産社員の橋爪新一氏と結婚し、ニューヨーク支店、上海支店に赴任しますが、39歳で夫と死別しています。

終戦後、英語ができたことから、NHK正面玄関にできた進駐軍向けのおみやげ物屋の店員となり、物を売るコツを習得します。

その後、日本初の女性自動車セールスマ

ンとなり、商才が覚醒。実業家として、多くの財を成し、様々な社長業を体験した後、56歳から宝石輸入商に転身しました。

麹町のドイツ人宅で働いていた際、浮世絵を整理する仕事をしている中で、海外では葛飾北斎や歌川広重などの絵師の存在や作品が日本を代表する芸術として高く評価されているにもかかわらず、国内においてその評価が低いことを憂っていた大津圓子は、実業家として成功を収めた後、美人画や役者絵等の浮世絵の収集にも力を入れました。伝統的な美術である浮世絵を、後世の若い人たちに見てほしいと願い、収集した浮世絵は平成10(1998)年に故郷の秦野市に寄贈され、平成12(2000)年に94歳で逝去しました。

### 大津 圓子 主な経歴

- 明治39(1906)年神奈川県中郡東秦野村に誕生
- 昭和2(1927)年東京都千代田区にある岩佐高等女学校を卒業
- 在学中に神田神保町のYWCAで英語を学ぶ
- 卒業後、麹町のドイツ人宅の英文タイピストとして働き、浮世絵整理の仕事をする。
- 21歳の時に、旧三井物産社員・橋爪新一氏と結婚。ニューヨークと上海の支店に赴く。
- 39歳で夫と死別
- 戦後 NHK 売店のおみやげもの屋の店員となり、物を売るコツをつかむ
- 日本で初めての女性自動車セールスマンとなり、商才が覚醒
- 56歳で宝石輸入商に転身
- 平成10(1998)年秦野市に浮世絵1904点を寄贈
- 平成12(2000)年逝去
- 令和7(2025)年没後25年を迎える

#### ● 著作

『女自動車屋』彩光社(1961)

『男なんかには負けられません~女実業家の泣き笑い~』

宝文書房(1966)

『ダイヤモンド物語』草土文化(1970)



## 女性たちの活動

### 婦人会活動のはじまり

昭和50(1975)年3月8日は国連(国際連合)が制定した「国際女性デー」であり素晴らしい役割を担ってきた女性たちによりもたらされた勇気と決断を称えるという日という意味があり、令和7(2025)年は制定から50年を迎える年になります。

日本の女性たちは封建的社会の家制度において“三従の教え”の下、良妻賢母・婦徳こそ美德とされていました。

しかし、明治27(1894)年の日清戦争を皮切りに明治37(1904)年日露戦争、昭和6(1931)年満州事変、昭和16(1941)年太平洋戦争と続く中で、凶らずも“銃後の護り”により女性たちが主体となって活動し社会に関わりを持つようになっていきます。

### 婦人会の組織

明治34(1901)年に日清戦争に出征した兵士の遺族及び廃兵の救済を目的に「愛国婦人会」が発足します。主に上流階級の夫人を中心に比較的裕福な家庭の婦人が多く慈善活動を主とした会でした。

昭和6(1931)年になると、文部省が後援する団体として「大日本連合婦人会」が発足します。義務教育の普及に伴い、学校教育への理解と家庭教育の振興を掲げ全国組織に発展しました。

昭和7(1932)年3月成立の「大阪国防婦人会」が同年10月に「大日本国防婦人会」に改称し、全国組織として発足します。「愛国婦人会」・「大日本連合婦人会」を統合し、軍部の総力戦体制づくりに全面的に協力するという趣旨で、「国防は台所から」をスロー

ガンに掲げ、割烹着に白たすきをトレードマークに全国へ拡大しました。



西秦野国防婦人役員代表 昭和14(1939)年

### 秦野地域の婦人会設立

- 東秦野村婦人会 明治40(1907)年
- 秦野町婦人会 明治45(1912)年  
※当時、秦野町には2つの婦人会組織(「秦野町婦人会」、「陶宮会」)があり、大正3(1914)年に合併しました
- 大根村婦人会 大正4(1915)年
- 北秦野村婦人会 大正6(1917)年
- 西秦野村婦人会 大正12(1923)年
- 南秦野村婦人会 不明

### 秦野の婦人会

秦野地域でも「愛国婦人会」の会員は比較的裕福な家庭の婦人が多かったようですが、当時の各会長はその地区の小学校長が担い、事務担当も小学校教員という状況で、地区の教育に関するすべての事項は小学校の責任において執行運営されていました。

昭和9(1934)年～昭和10(1935)年までの間には秦野地域でも「国防婦人会」の傘下に入りましたが、婦人会と国防婦人会との二枚看板を掲げていたようです。

主な活動としては、出征兵士の見送り、帰還兵士の出迎え、出征家族・遺族の見舞い、慰問袋に入れる品物の調達や発送、慰問、街頭に出での千人針作り、バケツリレーなどの消火訓練、炊き出しなどの防空訓練でした

が、北秦野村国防婦人会では農繁期に村託児所を開設して会員が保母役として協力していました。

戦後は食料の配給時代で物価も上昇し非常に苦しい生活を強いられていましたが、その中で各地区において新たな婦人会が発足しました。新しい婦人会は“自主婦人会”的な意味合いを持ち会長も会員たちが選出するというものでした。

### 秦野地域の新しい婦人会設立

- 秦野町婦人会 昭和 21(1946)年 5月
- 大根村婦人会 昭和 24(1949)年 2月
- 上秦野村婦人会 昭和 24(1949)年 8月
- 東秦野村婦人会 昭和 25(1950)年 5月
- 北秦野村婦人会 昭和 25(1950)年 7月
- 南秦野村婦人会 昭和 25(1950)年 9月
- 西秦野村婦人会 昭和 25(1950)年 10月

長い間の忍従生活から解放されていった女性たちは、時代の変遷により活動の場を次第に地域や福祉などの社会分野に広げるとともに自らの教養を高めるための学習や自己研鑽に努めていくことにより婦人会は地域に欠かせない存在となりました。



市婦人会連絡協議会 15周年記念大会 昭和 45(1970)年

### 婦人会活動と関野奈尾

関野奈尾は戦後、国防婦人会を土台として、新しい婦人会が発足した際、副会長となり、その後26年間にわたり、婦人会長を勤めた女性です。

小学校の教員を経て、大正14年に結婚。四男二女の子育てがひと段落つくと、周囲からの推薦により、秦野町婦人会会長に就任。神奈川県婦人会連合会長を2回勤めました。昭和41(1966)年から18年間にわたり県婦人会館の副理事長を勤め、その功績から、昭和49(1974)年11月に勲六等宝冠章を受章しました。

また、よりよい地域社会を目指して昭和48(1973)年に発足した、秦野市内の婦人関連団体の連合会である「秦野うぐいす会」の初代会長も勤め、市内11の婦人・ボランティア団体の会員約1万人をまとめあげました。

活動内容は市勢等についての意見を話し合う会合の他、国立神奈川病院でのボランティア活動などで、時には当時の市長から意見を求められることもありました。

その活動が認められ、平成16(2004)年4月に緑綬褒章を受章しましたが、時代の流れと共に、会員の高齢化や担い手不足等の理由から、秦野うぐいす会は平成26(2014)年4月に解散しています。



関野奈尾 昭和 55(1980)年



## 婦人学級

婦人教育については、昭和 26(1951) 年頃より振興の機運が高まり、文部省は昭和 29(1954) 年度～昭和 30(1955) 年度まで静岡県稲取町教育委員会に新しい学習内容と学習方法を試みた「実験婦人学級」を委嘱しました。

それは、文部省と町（教育委員会、県社会教育主事、稲取町婦人会）による組織的な協力で学習課程表を作成し運営組織を構成、一斉講義ではなく話し合い重視で運営のための役割を自分たちで分担、記録を残しグループ学習を実施するなどの特徴がありました。

参加者は 30 歳～ 40 歳が最も多く、若い世代の主婦たちを家族が応援・協力して送り出したようです。

昭和 31(1956) 年度からは全国的に婦人学級の委嘱を行い、昭和 35(1960) 年度には委嘱学級の拡大、指導者の研修、婦人団体への援助などを重点に婦人教育費の飛躍的な増額が行われました。

## 西秦野町の婦人学級

西秦野町婦人学級は、昭和 32(1957) 年 8 月 28 日より開催されて受講者は区長の推薦で選ばれました。初期の受講者は年齢層が高く、昭和 35(1960) 年に西秦野町は区長に対して若い世代を推薦するよう依頼をしました。

婦人学級は、講義を聞くのではなく話し合いを重視するもので 5～6 人のグループに分かれて身近な問題を話し合い、導者は話し合いを発展させる手助けをしました。婦人学級は単に知識を得るというよりも集団の中で自分の考えをまとめ、発言する力をつけることが重要視されていました。

内容としては「子どもの教育、しつけ、嫁・姑問題、生活改善」などを課題としていましたが、調査活動も重視されていたため収集した資料を分析し自らの生活を改善していくという課題などもありました。

日々忙しい生活に追われている女性にとって婦人学級に参加するということは特別なことであり、身なりを整え緊張感を持って臨んでいたようです。受講後に書かれた感想文は用紙いっぱい細かな字で記載されており、新たな時代に向けて女性たちが社会で活動・活躍していく意欲を伺うことができます。



西秦野婦人学級開校式 昭和 38(1963) 年

昭和 33(1958) 年に記された西秦野町の基本計画書・実施計画書には、婦人学級の問題点として「①知的向上意欲は旺盛だが時間的余裕の欠如、②婦人学級の歴史が浅く学級に対する認識の薄さ、③地区を細別して婦人学級を開設する場合の教材不足」が指摘されています。

女性たちは家事や育児のみならず、農作業など男性とともに過酷な重労働を担いながら婦人学級で真剣に学習し、より良い生活や住みやすい環境を目指して一生懸命に生きていました。



## 大津圓子寄贈浮世絵について



### 三代歌川豊国 安政5(1858)年 江戸名所百人美女



「江戸名所百人美女」は、江戸時代後期に活躍した三代歌川豊国が70歳頃に手がけた作品で、大判の錦絵の中央に美人画を描き、画面内の四角い枠内に江戸の名所を描いた美人画の揃物です。

吉原の遊女や大名家の姫君をはじめ、様々な年齢や身分、職業の美女を描いた作品で、当時の女性の風俗の様子を知る資料としても貴重です。

画面上部に添えられた枠内には、当時人気の化粧品「菊寿香」<sup>きくじゅこう</sup>を扱う人形町にある化粧品店「喜久寿」<sup>きくじゅ</sup>が描かれています。手にしているのは、「寿々女香」<sup>すずめこう</sup>と書かれた白粉（おしろい）です。

### 月岡芳年 明治21(1888)年 風俗三十二相 さむさう天保年間深川仲町芸者風俗

「風俗三十二相」は、明治20(1887)年から明治21(1888)年にかけて製作された美人画の揃物です。

様々な年齢や身分、職業の女性たちの日常生活を描いており、作品それぞれに「～さう(そう)」というタイトルがつけられています。

「さむさう」のモデルは深川の芸者です。深川には、岡場所と呼ばれる幕府非公認の遊郭があった場所で、深川の芸者たちは江戸の東南の方角にあったことから、辰巳芸者とも呼ばれました。

この女性の髪型は、江戸時代後期に大流行したつぶし島田で、丸い点を規則正しく並べた行儀小紋の着物を身に着けており、深川芸者の粋なおしゃれが表現されています。



### 大津圓子没後25年記念「広重 江戸名所四十八景」

はだの浮世絵ギャラリー（秦野市立図書館2階）では、大津圓子の没後25年に当たり、大津圓子により発行された版画集『広重』に掲載されている二代歌川広重「江戸名所四十八景」と、初代広重の「名所江戸百景」4点、合計52点を展示しています。

● 令和6年11月9日（土）から令和7年1月19日（日）まで 入場無料

はだの歴史博物館令和6年度企画展「秦野にいた女性たち—それぞれの物語—」

令和6(2024)年11月23日(土・祝)～令和7(2025)年1月19日(日)

〒259-1304 秦野市堀山下380-3

TEL 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794